

『慢性疼痛に対する直流電気鍼と良導絡評価～100 症例の検討～』

【目的】

慢性疼痛に対する有効な治療法は、未だ確立されていない。本研究では当院に通院する 2 ヶ月～2 年以上の理学療法で、症状に著変のない慢性疼痛を訴える 100 名の患者の疼痛部位に対し直流電気鍼による治療を行った。その前後での疼痛改善の変化と、全身の自律神経の変化を把握・検討することを目的とした。

【方法】

対象者は介入の同意を得た 20 歳から 86 歳の 100 名である。内訳は、脱落者 8 名を除いた腰部脊柱管狭窄症 23 名、頸椎・腰椎ヘルニア 56 名、肩関節周囲炎 8 名、肘外側上顆炎 4 名、変形性膝関節症 1 名である。

介入期間は 10 週間とし、疼痛評価と良導絡チャートの測定は鍼介入前に 1 回、10 週後の治療前に 1 回の計 2 回実施した。疼痛部位への直流電気鍼による治療の前後における疼痛評価は視覚的評価スケール（Visual analog scale (VAS)）により行った。VAS の改善についての評価に対する統計学的な検定は T 検定（有意水準 5%）により行った。

鍼治療介入の前後の全身の自律神経についてはノイロメーターを用いて良導絡チャートを作成し評価を行った。

【結果】

鍼治療介入前の VAS の範囲が 30 mm～90 mmであったのに対し、介入期間終了後の治療前の VAS は 10～70 mmであった。VAS を評価できた 92 名中 71 名で VAS が下がり有意 ($p < 0.05$) に改善した。良導絡チャートを測定できた 92 名についても、介入期間終了時には神経活動の乱れが介入期間直前と比較して 47 名が正常に近づいていた。残りの 45 名は疼痛の増悪はなく、良導絡チャートの変化も少ないが、興・抑点については多少の増減がみられた。

【考察】

良導絡チャートが乱れることは交感神経・副交感神経活動の異常が考えられている。本研究では直流電気鍼による疼痛改善と全身の自律神経の変化を良導絡チャートにて検討した。直流電気鍼治療により、疼痛と良導絡チャートが多く事例で改善されることから、直流電気鍼により痛みや乱れた神経活動が改善され、それにより全身の自律神経活動へ影響しチャートが平均値へ近づく変化が起こると考えられる。

【結語】

本研究の結果、疼痛部位への直流電気鍼により痛みの改善と共に、全身の自律神経にも良好な影響与えている可能性がある。また、疼痛においても今年の 70 名中 56 名の VAS の低下から、22 名増えた 92 名中 71 名の VAS の低下率を見ても、VAS は有意に低下している。これにより、理学療法で症状に著変のない慢性疼痛に対しての直流電気鍼の有用性が示唆される。